

「大地の詩 留岡幸助物語」

評者・前島 常郎



2011年 日本映画
監督 山田火砂子
出演 村上弘明、工藤夕貴
制作 現代ぶろだくしょん
上映時間 116分
全国各地で上映中
(スケジュールは、<http://www.gendaiapro.com/tomeoka/>)



「私は北海道の開拓に行くのではない。心の開拓に行くのである」

●ストーリー

京都で牧師をしていた留岡は、北海道の空知の監獄で教誨師を求める声に応じて愛妻夏子をつれて赴任したが、第一日目から、まるで動物のような扱いを受ける囚人の列に行き会い、シヨックを受ける。留岡夫妻の心は不安で満たされる。

育つ家庭に鍵があるという事実に気づく。

一方、空知の監獄で「鬼の有馬」と恐れられていた看守の有馬四郎助は、囚人対象に話される幸助の聖書の話に自らが感化されていくのを覚えた。有馬は後に幸助の最大の理解者の一人になる。

さて、教誨師をやめ、囚人の処遇について海外に学ぼうと、幸助は2年間アメリカに滞在した。欧米の監獄では看守と囚人との間に人間らしい交流があることに感激した。

留学から帰った幸助は、それまでは大人と同じ監獄で刑を受けていた少年たちを大人と引き離して独自に集めて更正させるほうが有効だと信じ、東京巣鴨に「家庭学

校」という名の施設を作る計画を立てた。少年たちにとって「学校にして家庭、家庭にして学校」にしたいというユニークな発想である。

その後、少年感化事業についての幸助の夢は、未開拓の原野であった北海道遠軽の地にまで広がったのだが、その頃、幸助の家庭には予期しない暗雲が……。

●みどころ

講演会シーンで、幸助の持論が展開される。

「教育上一番大切なのは、家庭である。次に大切なのは学校と社会である。人の子を教育する最も適当な場所は、地球上どこか？ オックスフォードかハーバードかエールかベルリンか？ 人間を良くする基本は家庭にある」

幸助が空知の監獄で個人的に教誨をした極悪囚の中には、後に伝道者となる好地由太郎がいた。後の日本オペラ界の立役者テノール歌手、藤原義江も家庭学校で修養をした少年の中にいた。家庭学校の生んだ実には目を見張るものがある。

幸助の幼年時代、キリスト教入信のエピソード、養父からの迫害、愛妻夏子とのなれそめなどは後半の幸助の講演場面で「思い出」として再現され、心温まるシーンとなっている。

●もうひとつ

知名度は決して高くはないものの日本の少年更正事業の立役者である留岡幸助をモデルにした佳作である。

ただ、やくざ集団が刃物を持って登場する場面、家庭学校の食卓での生徒の起こすいざこざ、また遠軽の地の開拓に反対する人々の登場場面などが、真に迫るものとは言いがたく少々とってつけの印象を与えたり、緊迫感に欠ける拍子抜けの場面もないとはいえない。

欲を言うなら、北海道の大自然をもっと大胆にとらえられなかったものだろうか。また、青少年が楽しめる作品ともいいがたい。

一般向け娯楽作品としては、もう一工夫必要だったのでは、と思うが、非行少年更正事業、北海道開拓史などの教育映画として多いに価値があるだろう。